

蕾のいろく

京子

四、洋ちゃん

圓顔の、ふさ／＼して髪をかぶきりにして、笑ふと可愛い口に眞白なきれいな齒をみせて兩の頬に笑くばをた／＼洋ちゃん。

といふと元祿袖をひろげてやつこさんのやうにバタ／＼と廊下をかけて来る様子が目に見える。赤い縁を取つた桃太郎さんのやうなエブロンを付けて。

洋ちゃんは無口な子だつた。あの入園當時には何か聞くと涼しい目を見張てだまつて保姆の顔を見つめてゐた。そしてキッチンと結んだ口もととは本當にばらの蕾のやうだつた。

洋ちゃんは組の中で年少なのになか／＼確りし

てゐた。ちぎメン／＼と泣くやうなことはなく何でも一人でしやうとした。お辨當の時箸がグルグル紙に包んであつて出せないと決して人に解いてもらはふとはせず、まつ赤になつてまで一人でしやうとする。その中に前やお隣のお子が一口二口はじめると、あせる、なほといけない。でちれつたくなつてとう／＼泣き出すことが度々あつた。確りしてゐるだけによく剛情を張ては泣いた。はじめの中はあまり多くの子と遊ばなかつたが、三四日する中にお庭でお人形さんごっこをする時に上の級の子達が皆でなみちやんを取りまゐて「お嬢さま」にして遊んでゐるのをみた。

そして「洋ちゃん、洋ちゃん」と云つて皆から可愛がられてゐた。

口をきくのはきらひだつたが機嫌のよい時にはこゝとよく笑つた、本當に洋ちやんは人形のやうな子だつた。一重まぶちの黒眼がちな、そして目立つほどではないがどこかにはぐるがあつた。

今月の十五日に母様と一緒に來た時にはかぶきを短くしてメリンスの友禪の袖を輕さうに、しばらくお休みで見なかつたせいが大層丈も高くしつかりしたと皆で云つて居たのに。

お土産の摺紙もいつものやうに手ざわよくこしらへて……「洋ちやんあしたからまたいらつしやるのね、皆で遊びませうね」と云つた時、室の入口の處で母様の後に立て居た洋ちやんがいつものくせで少し首をまげて笑ひながら肯いた様子が目にみえる。

「洋ちやんは、あの時、おいとまに來たのですね」他の保母の云た事が今更くりかへされる。

梅雨のならひととてたえまなく降りつゞく雨空、不案内な細いぬかる道を今日斯うして洋ちやんの

おくやみに來やうとは思はなかつた、思はなかつた………。洋ちやんの可愛い足跡が、かつてこの地に置かれたのだ、この花やのかざり柵も見ながら通たこともあるだらう、それをまがつて、などとしめほいあたりのすべてが洋ちやんの事を思つてゐるやうに見える。

まるい電燈に「露木」といふ字の、出て居る御門の左の方、垣の間からあぢさゐの花がみえた。あぢさゐ。この花をみると悲しいことばかり聯想しなければならなくなつた。祖父様は六月廿四日夕、そして洋ちやんは廿六日に。

お玄關に行くとお線香の香ひがたゞよつてゐた。心の中にしみこむやうな氣がした。型ばかりにおじぎをしてくやみの人の名を帳簿に記して居られる取次の方が——あの可愛い洋ちやんがどうしてこんな事に、どうしても夢のやうだ、どうか夢をさましたい。人形のやうな洋ちやんの永眠つた顔を見たらば……——とまで思つて來た私達に

は。あまりものたりなかつた。葬儀の日、時間。場處などを聞てゐる處へ看護婦が通た。ちよこくと袖にまつはつて洋ちやんが出て來たらと空なことを見て居ると、母上が出ていらしつて「こちらへ」とのことの上に上た。

玄關からすぐの室に白い屏風にかこまれて、小さい白いお棺が。……

あゝ洋ちやんは見られない。見られない。夢のやうなこの「洋ちやんの死」はさめて事實とすることなく永く／＼私の胸の中にはさめぬ夢になるのだらう。さめたいと思つただけれど「洋ちやんのお顔を見せていたゝきたい」とはこの時はもう云へなかつた。「存命中は色々御世話様になまりして」とおしやつたきり、そつとハンケチで眼を拭いていらした、あの父様の御様子をみては、何も云へなつた。

一滴の涙もおとすまじと、つとめ、つとめて、おなげきやおつかれに少し青ざめて、お出の母上

を見あげては……なほさらであつた。

お棺の下には小さい草履や杖がみえる。

器用だつたあの小さい手はもうあんなものをもたなければならぬのかしら。洋ちやんの母様はあまり多くをお話にならなかつた。

「おあとを御大切に」とお玄關を辭した時、をやみない雨はいよ／＼降て瓦斯燈の光がうるんでゐる。それから一人植物園の傍の細い坂を下りながら今朝こゝを上る時には思もよらなかつた「死」といふことを考へ、また洋ちやんの生前へ追想がたどつて行つた。

「洋ちやん、父様はどこへ行らしたつて？」

「大學へ」

「お母様は？」

「おしごと」

斯うした會話が入園後二三週間して後、洋ちやんと保母達との間にあつた。その時のお答は少し耳を傾けて聞く位な小さい、けれどもきれいな可

愛い聲であつた。

興にのつて笑ふ時の外はあまり大きい聲を出さなかつた。たつた一度幼稚園でおかへりの會集がすんで遊戯室から出て來るとき、小學校の兄が庭に迎に來てゐたのを見つけて「兄さん」と一聲大きな聲を出したことがあつた「まあ洋ちやんが」とびつくりすると同時にお兄様に會つたのがどんなにかうれしかたのだらうと察したことがあつた。

「父様の御洋行中に生れたので洋ちやんといふ名だ」といふことはつたへ聞きにきいてゐる。父様もどんなにか可愛がつてお出だつたらう。よく大學へお出がけに洋ちやんの小さい手をひいては幼稚園に送りこんでいらした。その時のお父様の御様子と今日の御様子と、そんな事を思て居ると、バタ／＼とあまやけたやうに兩手をひろげてにこ／＼しながらうしろについて來る洋ちやんの姿が。……足音までするやうな氣がして思はずふりむいたが、ぬかるみきつた梅雨の街、ぼんやりし

たがす燈に夕の色がたいよつてゐるばかりし。

あゝ、夢のやうだ、さめるかしら。と家の門をくいるまで、否、臥床に入るまで私の胸は「洋ちやん」の名を抱いてゐる。

五、千富美さん

茶がちな目に愛くるしさをたへて、色白な、丈の低い、そしてブリ／＼と肥た、手首のくびれた具合、小さい指の背にボチ／＼へこみの出來た處、體格から云ても心持から云てもほんとうに分なく育つた子。少し茶味のある、おけれどもすなほな、たつぷりある髪をまあるい頭の形どなりに短く切て、あらい棒縞のさつぱりした、簡単な服に、眞白な靴下とみちかい裾との間に肉付のいゝ足を見せて、いつも先生の後から行てはしつかりと手を握つてゐる、この子の名は「千富美さん」おきんちやくといはれるほど先生の傍に居ることが多かつたが（それも年を思つては受持の保姆

は無理もないと許してゐた)それであるてまた何でもよく獨りでする、そして自分より丈の高い新しく入つた姉様達によくお友達になつてあげる、同じ位の小さな者とみるとすぐと姉様きどりで色々細かい世話までもする。

色は黒いがふとり具合も、丈のひくさも同じ位な愛ちやんが入りたてに、千富美さんが帽子を取つて上げようとしたが朝附添の女中がかけて行たとみえて背のびをしても、とびついても、とれない。すると千富美さんかうすればいゝの。とよろしくしながら愛ちやんを抱いた。そして二人で帽子をやつと取てニコ／＼してゐる事があつた。またお人形が大好きで、雨が降ると洋服の上に紐でおんぶして室で遊んでゐた。庭ではブランコが好きでよく乗た、あまり口数はきかない方で、入園したてはだまつて長いまつげを時々バチ／＼させながら先生の衣服をつかまへてゐた、「千富美さん」と呼ぶと口を結んだまゝ、フム……とふざけて

は笑つた。丁度繪のお月さまの笑顔のやうに、りんごのやうな頬の下に、可愛い口の兩側に八の字をかいて。同じお友達であるて愛ちやんはきりつとして、どつちかといふと神經家、千富美さんはむとんぢやくなのんき家だつた。お話の時など、千富美さんはだまつてニコ／＼して聞いてゐて、少しあきたりすると肥たお手々を二つ、あごの下にならべて頬杖をついたりすることもあつた。が、愛ちやんは一心に兩手を(先生の命令通りに)腰かけの後ろにやつて姿勢をよくして聞いてゐたが少し興奮した時などは痾高い聲で「先生愛ちやん知てゐます」とそれからそれへとしゃべりはじめたりした。

或時、千富美さんを横抱ヨコカきにして「こんな大きな赤ちやん」といふて目をつぶつてしまつた。

「オヤ」といふとばちと開いて、

「フム……。メリさん」

「メリさんて、どなた?」

「私のお人形さん」

「どなたにいたゞいたの？」

「パパのおみやげ」ゆつくりした調子で答へながら相不變ニコニコしてゐた。

お迎ひがおそくても、心配して泣くような事はなく、麥藁帽子をあみだにかぶつて、人の居ない玄關の段々に一人ポチにて腰をかけて、のんきにいつまでもまつてゐる。

「長崎へ轉任いたしますので」と退園届を母様もつていらした時、羽二重の白い服をきて、相變らず口もとに笑くぼをみせてゐたのんきな千富美さんの様子になほさら先生はつらい思ひをした。

「お姉様に御本の間へ入れておいたゞきなさいね」と庭の萩を一枝、小さい、肥た手にもたせて、可愛い衿首を、あの人形のやうな後姿を、——自分のと思つてゐるものを手からもぎ取られてしまふやうな氣持で——先生は見送てゐた。

幼児感情調査

城東幼稚園調査

左に掲ぐるは大正三年より同五年に至る三年間東京市日本橋區城東幼稚園に於て擔任保母をして毎年四月入園の幼児に就き入園當時一ヶ月以内に於て調査せしめたる幼児感情調査表なり。因に該調査の對象たりし幼児數は全體に於て百九十三名なりき。

I 崇敬感情

崇敬感情を調査すべく幼児に對して發せる質問語は「一パンエライカタ」と一定せり。

神	天皇陛下	六
神	神武天皇	三名
神	乃木大將	二
大將	大將	五
祖	祖父	四
祖	祖母	五
父	父	三八
母	母	六